

若者の声が社会を変える。 ジェンダー平等への アクションがつなぐ希望

一般社団法人

GENCOURAGE

SNSに集まった声をきっかけに、若い世代の意見をこぼさぬよう政策提言を続けてきた一般社団法人「GENCOURAGE」(ジェンカレッジ)。高校生のころからジェンダー課題に関心を寄せ、自らアクションを起こしてきた櫻井彩乃さんが設立した団体だ。今日、「ジェンダー」という言葉を口にする、意見の違いがあらわになったり、他人事として受け止められ否定的な反応が返ってきたりすることも少なくない。

「若い人たちにも意見はある。でも、それをすくい上げる仕組みがない」

櫻井さんは、ジェンダー課題についてもっと知りたいと感じながらも、つながる場を持てずにいる同世代が全国に「孤立」している現状に着目した。

そこで生まれたのが、オンライン講義を軸とするサードプレイス「ジェンカレ」だ。

政治、性教育、性暴力被害など、各分野でジェンダー課題に向き合ってきた

専門家を招き、全13講座を実施。参加者が学びを自分なりのアクションへ

落とし込むところまでを設計している。さらに、地域や年代のニーズに応じた

プログラムも展開する。若者の声を政策提言へとつなぎながら、

国内で「アクションする人」の輪を、着実に広げている。

1000件超の声から始まった

「進路や働き方を性別で決めつけられる」「ジェンダー規範の押し付けが苦しい」「若者の声をもっと聞いてほしい」――。

そんな本音が、SNS上にあふれていた。きっかけは2020年、「第5次男女共同参画基本計画策定に当たっての基本的な考え方(素案)」に対するパブリックコメントの募集開始だった。それまで、日常の中で性別規範への息苦しさを感じていても、それを意見として表明できる場はほとんどなかった。ましてや、政策議論の場は遠い存在。2012年から国内でジェンダー課題に取り組んできた櫻井さんは、「生活」と「政策提言」の間に横たわる壁の高さを実感していた。

そこで展開したのが、SNSキャンペーン「#男女共同参画ってなんですか」だった。呼びかけに応えるように、全国の若者から1050件を超える声が寄せられた。1000ページに及ぶ素案資料を読まなくても議論に参加できるよう、わかりやすい情報発信を行い、定期的にオンラインイベントも開催。パブリックコメントへの参加のハードルを下げていった。

実際、10〜20代から届いたのは、日々の息苦しさや将来への不安の声。そして同時に浮かび上がったのが、「声はあるのに、政策議論の場に届いてい



櫻井彩乃代表理事

ない」という現実だった。

若者が安心して語り、対話し、仲間とつながり、その声を社会へと届けたいく場合は、当時ほとんど存在していなかった。「それならば、ともに学び、対話し、つながり、行動できる場をつくらう」。こうして2021年、GENCOURAGEは立ち上がる。3年後に法人化した。「Gender(ジェンダー)」と「Encourage(勇気づける)」を掛け合わせたその名には、一人ひとりの一歩を後押ししたいという願いが込められている。

SNSで声を上げたことも、パブリックコメントを提出したことも、最初は小さな一歩だった。だが、その一歩は次の誰かの背中を押す力になる。小さく、ポジティブなアクションの連鎖



過去のジェンカレ生

こそが、社会を確実に前へと動かしていく。櫻井さんが確信していることだ。

学校を動かしたジェンカレの学び

GENCOURAGEでは、全13回のオンライン講義を軸とするサードプレイス「ジェンカレ」を運営している。年齢を問わず「聴講生」として参加できるほか、15〜29歳は「ゼミ生」として約半年間、オンラインコミュニティでの対話や、企業経営者などメンターによる伴走支援、自らのジェンダーアクションを構想する合宿などに参加することができる。

これまでに約1000人のゼミ生を輩出し、ジェンダー課題解決に取り組む15団体が立ち上がった。中には国や地

GENCOURAGE

全国、「ユースが包括的にジェンダー課題を学び、アクションを行う支援プログラムGENCOURAGE(ジェンカレッジ)」

<https://gencourage.org/>



(左上から)梁本彩夏さん、櫻井彩乃代表理事(左下から)山田麻央さん、高橋真愛美さん(2026年2月9日最終発表会参加者)

方公共団体の審議会委員に就任した修了生もいる。ジェンカレの学びは、理論や共感で終わらない。それを具体的な行動へと変え、現場を動かすところまでを見据えている。

修了生の高橋真愛美さんは、高校1年生のときに第2期として参加した。性被害の構造に疑問を抱いたことがきっかけだったという。それまでは「社会課題なんて身近にないと思っていた」と振り返る。しかし講座の中で、ジェンダーに基づく暴力（Gender-Based Violence）などを学ぶうちに、点だった違和感が線でつながっていった。

課題図書を読み、統計を調べ、身近な人とジェンダーについて対話する。レポート提出もあり、負荷を感じることもあった。それでも、「今まで当たり前だと思っていたもののメッキが、どんどん剥がれていく感覚でした」と発見が多かった。

合宿で立てたアクションプランで、高橋さんが選んだのは教員への働きかけだった。同世代に訴えるよりも、指導する側にいる大人に伝えることで、より多くの生徒に影響を与えられるのではないかと考えたからだ。

通っている高校では毎週、探究科目の担当教員による会議が開かれていた。その時間をもらい、教育現場におけるジェンダー視点の必要性をプレゼンテーションした。進路指導に潜む無意識のバイアス、理系進学における男



高橋真愛美さん

女差、歴史教育に登場する人物の偏り。具体的な数字と事例を示しながら、「授業の中で問いを立てることはできないか」と提案した。「すごく勇気が要りました。でも先生たちが受け皿になってくれる学校で、話しやすいようにサポートしてもらえました」と、安堵したことを覚えている。

会議の様子を映した録画は、後日クラスメイトにも視聴してもらった。すると、「身近な人が女性であることを理由にパワハラを受けている」「自分もジェンダーについてモヤモヤしている」といった声が寄せられた。

さらに、高橋さんのアイデアの一部は実際の授業にも反映された。学生の提案が、学校という枠組みの中に入り込み、複数の生徒へと波及した。小さな

な一歩が、構造の中に確かな変化を生んだ瞬間だった。

「頭の中のアイデアで止まらずに、現実までのハードルが一気に下がりました」。ジェンカレで出会った仲間やメンターは、行動を後押しするネットワークとなった。これからも相談できる人がいる。壁にぶつかったときに共感してくれる人がいる。この経験をきっかけに、大学進学後も学びを深めていくつもりだという。

いち参加者から、場をつくる側へ

ジェンカレは、受講して終わりではない。修了生がファシリテーターとして各地のワークショップに立ち、「参加者」から「場をつくる側」へと役割を移していく。学びが一方向のインプットで終わらず、実践へと循環する設計だ。プログラムは対象や目的別に用意されている。短時間で完結するワークショップ「Dayジェンカレ」、地域で行う「ジェンカレfor Local」、教育現場で学ぶ「同 for School」、若者との対話で企業価値を上げる「同 for Business」。地域や組織の文脈に応じて、入り口を変えている。

高橋さんは、1Dayジェンカレのファシリテーターとして各地を回る中で、対話の大切さを実感したという。「同じ世代でも、ジェンダーと聞くと身構えてしまう方もいます。でも一緒にワー



最終発表会団体報告の様子

クショップをやってみると、みんなで自分ごととして考えられる。ジェンダーは対立するものではなく、ポジティブに向き合うこともできるテーマなんだと実感しました。もっとこの活動が広がればいいなと思っています」

3期生の山田麻央さんもまた、各地での経験が視野を広げたと語る。「ファシリテーターとして地域に出向く中で、ジェンダー主流化の必要性を強く感じました。同時に、安心して話せる場づくりが本当に大事だと実感しました。ジェンカレで得た学びを、今度は私が広げていきたいと思っています」

普段は関西に住む1期生の梁本彩夏さんにとっては、地域を越えたつながりそのものが支えになった。「何度もジェンカレのみんなと顔を合わせることで、できたことで、一人じゃない、みんなで作っているんだと実感できて、とても有意義な時間でした」。今ではGENCOURAGEの運営側として活動を支える立場にいる。若者が育ち、支える側に回る。この循環自体が、ジェンカレの成果である。

地方で起きている静かな孤立

YUIみらいプロジェクト採択後は、地域や学校、行政と連携しながら、若手ファシリテーター育成や、1Dayジェンカレの展開に力を入れた。地方で実施する場合、多くは2回セットで

実施する。1度目は学びと対話。2度目は数カ月後、参加者が持ち帰ったアクションの成果を共有する場だ。そこには若者だけでなく、行政担当者や地域の担い手も参加する。話して終わりにしない。「次に何を一緒にできるか」という問いを必ず残すようにした。

特に地方では、「これを言ったら浮くかもしれない」、「否定されるかもしれない」という不安感が、当事者を静かに孤立させていく。櫻井さんの印象に残っているのは、福島県男女共生センターで開かれたIDayジェンカレの日。会場には、高校生や大学生、社会人が集まった。男子学生の姿もあったという。参加者の一人は、こう漏らした。

「福島で同世代とジェンダーについて話せると思っていませんでした」。違和感はあるにしても、言葉にできない。言葉にしても、受け止めてもらえるか分からない。参加者の言葉から、そんな不安が渦巻いていたことが読み取れた。

首都圏にいると見えにくいことが、地方では鮮明に浮かび上がる。大学進学に否定的な周囲の声。「長男だから」という無言の重圧。ジェンダー課題解決の拠点であるはずの男女共同参画センターに、若い世代が足を踏み入れづらい現実。地域資源があっても、アクセスの入り口が閉じていることも少なくない。

GENCOURAGEが向き合おうとしているのは、そんな「静かな孤立」であ



ワークショップ教材を説明する櫻井さん

櫻井さんはそう語る。声を集めること自体が目的になってしまえば、参加した若者の期待はやがて無力感へと変わる。だからこそ必要なのは、その声を「制度」に落とししていくことである。

その実践の一つが、GENCOURAGEのメンバーによるアドボカシープロジェクト「YOUTHPEAK」だ。ユースの声を国や自治体、企業に届け、社会のルールや制度、組織の仕組みを変えていくことを目指す。特徴的なのは、単独の団体として要望を出すのではなく、ジェンダー平等に取り組む組織や個人が連帯し、ともに声を上げる点にある。小さな声を束ね、政策決定の場に届く規模へと編み直していく。

2020年に始まった「#男女共同



ワークショップ教材を説明する櫻井さん

る。だからこそ、各地で参加者を増やしてきたジェンカレを軸に、「ゆるく全国でつながるネットワークをつくること」が重要になると櫻井さんは話す。心理的安全性が担保された場で、初めて違和感は言葉になる。そして、その言葉を次の行動へとつなげていく。その積み重ねは、地域の風景を少しずつ変えていく。

再現可能な仕組みづくりへ

YUIみらいプロジェクトの助成金を活用し、ワークショップ教材「ジェンダー平等のとびら」も新たに制作した。地域や学校、メディアなど身近な場所に潜むジェンダー課題を見つける「ジェンダーレンズカード」。今できる行動の

参画ってなんですか」から5年。第6次男女共同参画基本計画に向けては、2025年夏のパブリックコメント募集を見据え、「第6次男女共同参画基本計画にユースの声を届けよう」というキャンペーンを牽引した。

重要なのは、「若者の意見を聞く」段階で止めないことだ。意思決定の場へバトンをつなぐ仕組みをつくること。そのためには、審議会や政策形成過程への若者参画を制度として組み込む必要がある。実際に、若者や女性を一定数審議会に登用する条例を持つ自治体もある。だが、国レベルではまだ十分とは言えない。「内閣府男女共同参画局の中に、若い世代だけの審議会を設ける必要があると思います」。櫻井さんはそう提起する。

若者を「意見を聞く対象」としてではなく、「政策形成の主体」として位置づける。その構造転換こそが、求められている。

持久走としてのジェンダー平等

山積する課題の一方で、確かな手応えもある。「ジェンダー平等は、短距離走ではなく持久走ですよ。だからこそ、小さな変化を成功事例としてキャッチし、次へつないでいくことが必要だと思うんです」。その言葉には、現場を積み重ねてきた実感がこもる。

ジェンカレで学び、対話し、アクシ

ヒントを示す「マイボイス・マイアクションカード」。そして、対話を書き留められるワークブック。場の熱量を一過性で終わらせないための、再現可能なツールである。若者が場をつくり、再び次の場を生み出していく。そのプロセスそのものが、ジェンカレの目指す変化である。

声を制度へ—— YOUTHPEAKとつづき挑戦

GENCOURAGEが育ってきた「場」から生まれた声を、実際に社会を変えていく力へと変えていく。そこに踏み出すのが、次のフェーズだ。「若者の声を、聞いて終わりにしてしまうと、ただの失望につながってしまいます」。



ジェンカレで新たに制作したワークショップ教材

ンを起こす。ファシリテーターとして場をつくる。そして政策提言や意思決定の場に加わる。若者を中心に、点を線で結び、やがて面となって広がるエコシステムの構築だ。

若者が安心して声を上げられる場をつくり、その声を地域へ、そして制度へと接続する。制度が変われば、次を担う若者が声を上げやすくなる。その循環を絶やさないための仕組みづくりが、今問われている。

踏み出した一歩は、やがて誰かの勇気になる。孤立をほどこき、言葉を生み、行動を後押しする。その連鎖が続く限り、ジェンダー平等は決して「遠い理想」ではなくなるだろう。私たち自身の小さな選択の中にこそ、希望がある。



ジェンカレ4期生による最終発表会の集合写真